

令和元年6月18日現在

機関番号：35408

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2015～2018

課題番号：15K12925

研究課題名(和文) 留学が学習者の英語力と内面的変容に及ぼす効果の統合的メカニズムに関する縦断的研究

研究課題名(英文) A longitudinal study of effects of study abroad on learners' English proficiency and internal aspects

研究代表者

山川 健一 (Yamakawa, Kenichi)

安田女子大学・文学部・准教授

研究者番号：00279077

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,400,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、大学生の日本人英語学習者を対象にして、「留学の影響・効果」を様々な側面から縦断的・総合的に明らかにしようとするものである。留学前後の英語力の測定、留学中のウェブ型ポートフォリオのデータ、帰国後の半構造化インタビューのデータから判明した主要な結果は以下の通りである。学生の留学中の主要な体験は、留学する環境や時期や留学プログラムの内容によって内容に相違や変化がみられる。留学での経験には、もともとの個人の性格や考え方や歴史的側面が大きく影響する。留学中に経験する問題からの脱却には、現地での人間関係に基づく社会的サポートが必要である。

研究成果の学術的意義や社会的意義

留学の効果は一般的には体験的に理解され共有されているが、どのようなプロセスを経て学習者は変容するのかについて光を当てて明らかにした点に学術的意義がある。もともとの個人の性格や考え方や周囲とのインタラクションの仕方が留学に影響を与えていくということなどが判明したので、教育機関では、英語力の変化だけではなく、学習者の諸側面を総合的に考慮することによって留学の成果について評価をしていく必要がある。また、留学する大学や留学プログラムの種類によって、学習者の体験や意識も異なることが判明したので、教育機関は留学プログラムを策定する際にはそれらの選択や内容が及ぼすインパクトを想定する必要がある。

研究成果の概要(英文)：The present research attempts to illustrate effects of study abroad on Japanese learners of English in various respects in a longitudinal, comprehensive, and integrative way. The following are the main findings based on their English proficiency test scores, their regular reports written in the portfolio on the web, and the data of the semi-structured interviews conducted after study abroad: 1) their experiences and reflections are characterized as different according to the places they studied and the program contents; 2) their learning process was characterized by an intricate interplay of their past life experiences and their characters; and 3) social supports from their environment are necessary in order to find solutions to their daily problems.

研究分野：英語教育学

キーワード：留学 留学の効果 留学の評価 ポートフォリオ アンケート 質的・量的分析

## 様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

留学の効果に関する先行研究では留学の効果の一側面を個別に調査しており、総合的な留学の影響・効果という点では学術的に不明な点が多い。また、主に留学の前後の変化のみに焦点が当てられており、学習者の個別の経歴や外部要因、加えて留学の効果の持続性や長期的変容といった点まで射程に入れた研究は非常に少ない。また、学習者の英語力の伸長と内面的変容が十分に関連付けて研究されていない。以上を踏まえて、本研究では以下の研究目標を策定した。

### 2. 研究の目的

本研究は、大学生の日本人英語学習者を対象にして、「留学の影響・効果」を様々な側面から「縦断的・総合的・統合的」に明らかにするものである。具体的には、1つの学習者集団を複数年にわたり縦断的に調査し、留学の影響・効果の長期的変容を探る、英語力の伸長を総合的に測定する、学習者の内面的変容を総合的に測定する、従来別々に研究されてきた学習者の英語力と内面的変化と外部要因を様々な量的・質的手法を用いて統合的に調査して理論化を試みる、従来探求が困難であった留学前中後の内面的変容に影響を与える要因について、ウェブ型ポートフォリオを用いて明らかにする、応用的側面として、教育機関での留学の事前・事後指導ならびに留学中における適切で効果的なサポートのための具体的な示唆を得ることを目的とする。

### 3. 研究の方法

本研究では研究期間を留学前・留学中・留学後の3つに大きく分け、同一の調査対象者から量的・質的データを得る。留学前の調査対象者の英語力、内面的要因、個人の英語学習履歴についての基礎データを整える。次に対象者がアメリカに半年間留学をしている際は、ウェブ型ポートフォリオを用いてアンケートや留学記録を定期的に回収する。帰国後は同様に英語力や内面的要因等の測定を行い、留学前後の変化を総合的・統合的に考察するとともに、留学の影響・効果がどのように長期的に変容するのかについて分析を行う。

### 4. 研究成果

#### (1) 留学中のポートフォリオのテキストマイニング分析の結果

留学中に学生はウェブ型ポートフォリオを用いて留学中の出来事や感情を記録した。そのデータを整理して、文字データとして量的・質的に分析した。量的分析にはKH Coderというデータマイニングのためのソフトを使用した。分析の観点は、1)学生は留学中に何を経験したのか、2)2つの異なる留学先で何か違いは見られるのか、3)時間とともに学生の経験は変化していくのか、であった。その結果、上記1については、共起ネットワーク分析を用いた結果、学生の記述は、「授業・クラスメイト」「英語」「ホストファミリー」「振り返り」の4つの分野について主に記述されていることがわかった(下記図1)。上記2については、2つの異なるキャンパスそれぞれに特有の留学形式の違いが反映された異なる記述がなれていることが量的に示された(下記図2)。図2にあるように、特徴語においては、ホストファミリーに大きく依存する生活形態なのかどうか示されている。また、上記3については図3にあるように、クラスター分析によって2つのキャンパスで大方3つの異なる時期に分けられることが判明した。以上のことから、学生の留学中の主要な体験は、「授業・クラスメイト」「英語」「ホストファミリー」「振り返り」の4つのカテゴリーに分けられる一方で、留学する環境によっても、そして留学している時期によっても、体験する内容に相違や変化がみられるということが量的に示された。この結果については、下記「学会発表」の で口頭発表を行った。

また、これらのテキストマイニング分析の結果と、学生の英語能力試験の結果やその他のアンケート結果を総合して分析し、過去3年間の北米への留学プログラムの評価を行った。分析の観点は、1)学生がどのようなことを学んだか、2)学生がどのような問題を抱えていたか、3)異なるキャンパスで学んだ学生の回答にどのような違いがあるのか、4)3か年での変化にはどのようなものがあるのか、5)プログラムをさらに改善するために大学としての今後の課題は何か、等の問いに答えることであった。その結果、他国の留学生との混合授業のインパクトは大きい、大学独自の独自プログラムを改良する必要がある、リスニング力は向上するが、リーディング力の更なる向上が必要、ホームステイの満足度は非常に重要である、留学人数とホストファミリーの供給のバランスは重要である、ホームステイの形態(シングル・ダブル)や場所(キャンパスからの距離)はホームステイの満足度に影響しておらず、ホストと学生の個人間の問題に依拠する部分が大きいと推測される、留学中の学生の留学の振り返りが抽象的で浅い面がある、ということが特徴として浮かび上がった。特に、上記の特徴については、図4にもあるように、日本人同士のみクラス編成であったものが、ある年度から他国からの留学生との混合クラスに変更をしたキャンパスにおいては、振り返りの内容が異なっていることがわかる。この結果については、下記「学会発表」の で口頭発表を行った。また、学会発表 との結果については、下記「雑誌論文」の にまとめた。

(2) 学生の帰国後のインタビューに基づく質的分析

約半年の北米への留学プログラム参加者を対象にして、学生が留学中に記録したポートフォリオならびに帰国して約1年後に行った半構造化インタビューをもとに学生の留学における学び、そしてその前後の日本での生活を質的分析により可視化し、留学での体験の特徴を明らかにしようとした。分析の観点には、1) 留学では何が起きているのか、2) 内面的変化のきっかけは何か、3) 複数の留学体験者の語りにはどのような多様性と共通性があるのか、であった。半構造化インタビューで得られた音声は文字化して、分析には複線経路・等至性モデル(TEM: Trajectory Equifinality Modeling、サトウ, 2009; 安田・サトウ(編), 2012; 安田・サトウ(編)ほか)を用いた。分析には調査対象者のうち、2つの異なるキャンパスからそれぞれ2名ずつ計4名を選んでTEMの分析対象とした(図5は、4名のうち被験者Kの留学中の体験を表したTEM図の一部分である)。その結果、留学の内容は留学者の性格と複雑に影響し合い異なる効果を示す、留學生活の最初は順調でも、後日何らかのスランプに陥る、大きな問題からの脱出にはSG(Social Guidance: 社会的助勢)が働いている、自発的な自分の働きかけによる現地での人間関係への働きかけが、留学者の自己効力感の向上につながると考えられる、などが特徴として挙げられた。これらの結果については、下記「学会発表」のとて口頭発表を行った。学会発表は、特に被験者Kの体験に焦点を当てたケーススタディであり、学会発表は、Kを含めた4名の体験の分析であり、共通性も含めて明らかにしようとしたものである。

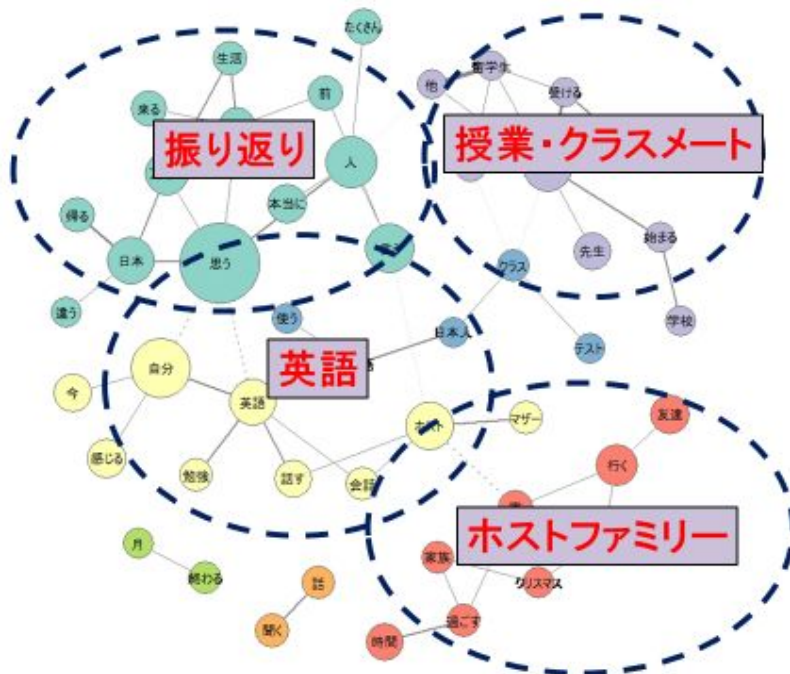


図1 学生の振り返りの共起ネットワーク分析

## Distinctive words for the second chapter (campus-month)

University A				University B					
A	October	A	November	A	December	A	January	A	February
思う	109	日本	059	思う	074	帰国	065	留学	046
think		Japanese		think		return to Japan		留学	brood
授業	098	言う	088	人	087	人	085	ホスト	043
classes		say, tell		people		think		ホスト	host family
自分	081	人	082	自分	087	アメリカ	083	行く	040
自分		people		myself		the U.S.		go	
ホスト	076	最近	049	クリスマス	055	日本	047	最後	039
host family		recently		Christmas		Japan		last	
言う	072	感じる	048	日本	048	友達	039	思う	038
say, tell		feel		Japanese		friends		think	
英語	088	授業	048	サンフランシスコ	047	留学	037	感謝	038
English		class		San Francisco		study abroad		appreciation	
話す	066	ホスト	044	帰す	047	成人	035	英語	038
talk		host family		leave		adult		English	
感じる	094	テスト	039	ホスト	047	楽しい	033	成長	037
feel		test		host family		happy, glad		grow	
今	046	時間	035	終わる	044	少し	033	本当に	035
now		time		end		a little		really	
会話	046	友達	035	感じる	043	クリスマス	033	泣く	032
conversation		friends		feel		Christmas		cry, weep	
B	October	B	November	B	December	B	January	B	February
自分	069	言う	077	クリスマス	070	思う	074	DAVIS	067
myself		say, tell		Christmas		think		Davis	
授業	067	人	056	家族	060	自分	073	留学	061
classes		people		family		myself		study abroad	
人	062	日本	088	プレゼント	052	人	062	スピーチ	082
people		Japanese		presents		people		speech	
英語	052	行く	054	自分	052	日本	054	関係	048
English		go		myself		Japan		relation	
楽しい	046	アメリカ	053	先生	047	帰る	053	感謝	046
fun		the U.S.		teachers		return		appreciation	
感じる	042	笑	048	冬休み	042	アメリカ	053	帰る	041
feel		laugh		winter break		the U.S.		speech, talk	
日本語	042	楽しい	048	アメリカ	040	英語	049	自分	041
Japanese		fun		the U.S.		English		myself	
本当に	040	本当に	043	本当に	039	本当に	048	人	040
really		really		really		really		people	
話す	038	聞く	039	行く	037	出来る	038	出会う	037
talk		listen, hear		go		can, capable		meet	
時間	038	先生	039	家	038	今	038	友達	038
time		teachers		house		now		friends	

the Jaccard coefficient value

図2 学生の振り返りの特徴語の分析



図3 学生の振り返りの留学時期ごとのクラスター分析

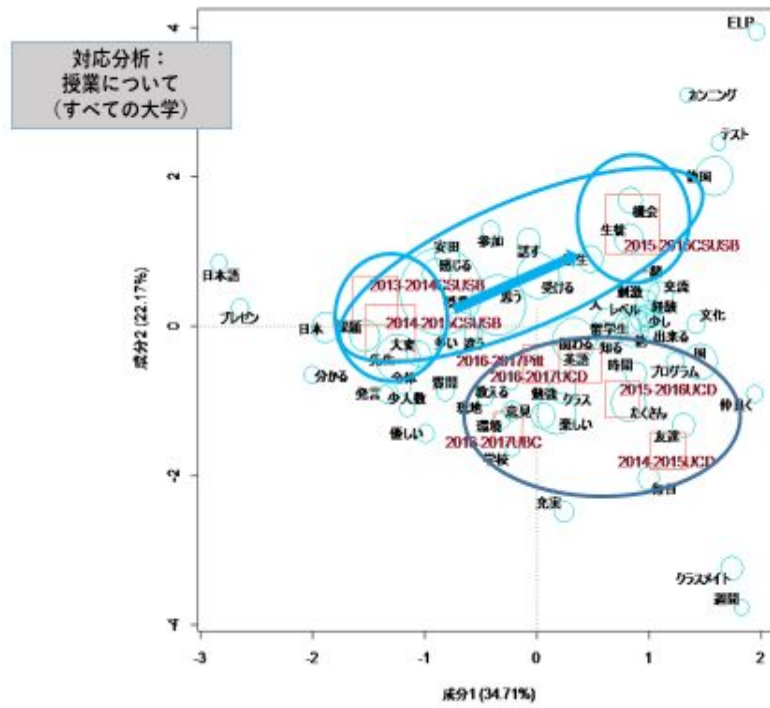


図4 学生の振り返りの2つのキャンパスの対応分析

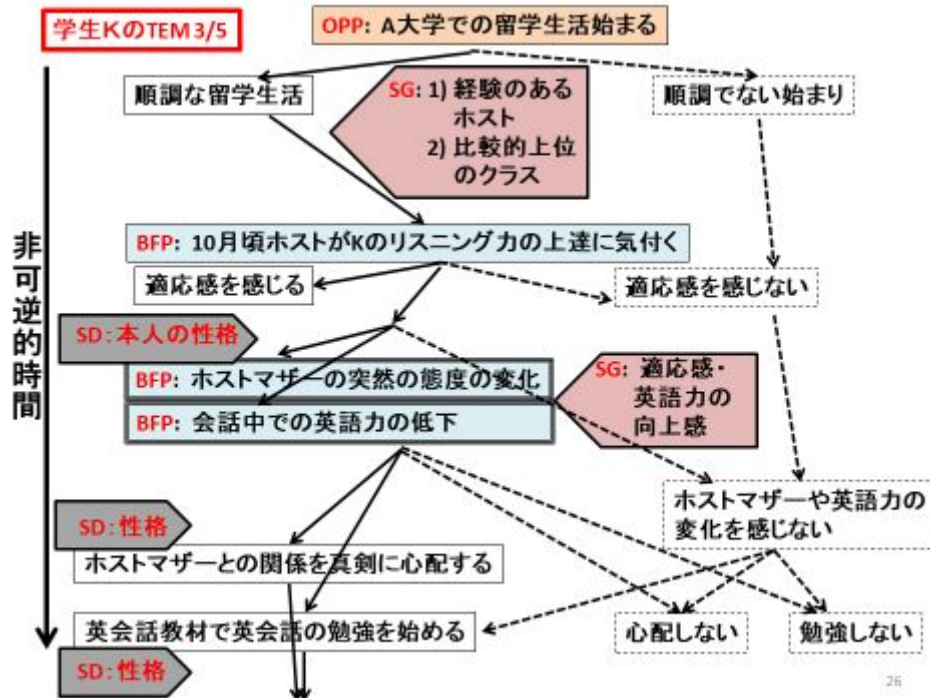


図5 学生KのTEM図

## 5 . 主な発表論文等

### 〔雑誌論文〕(計1件)

山川健一. (2017). 「学科全員留学プログラムの評価を目指した留学後の学生アンケートの質的・量的分析」 『京都大学高等教育研究』第23号, 1-11.

### 〔学会発表〕(計4件)

Yamakawa, K. (2016). A preliminary study of the impact of a five-month study abroad program: An integration of quantitative and qualitative approaches. The Seventh CLS International Conference (CLaSIC 2016) at National University of Singapore, Singapore.

山川 健一. (2017). 「学科全員留学プログラムの評価」 第23回 大学教育研究フォーラム (京都大学吉田キャンパス).

Yamakawa, K. (2018). Case Study Research in Study Abroad Narratives Using the Trajectory Equifinality Approach. 53rd RELC INTERNATIONAL CONFERENCE at SEAMEO Regional Language Centre, Singapore.

山川健一. (2018). 「留学経験者の語りから見える学びのプロセス」 第24回大学教育研究フォーラム (京都大学吉田キャンパス).